

自著を語る。



音楽と医療2つの接点になり得た「パトグラフィー」(病跡学)

なぜ「パトグラフィー」(病跡学)の研究をするようになったのですか。

過去の芸術家や天才について、精神医学的な立場から、その人の生き方や作品を研究するという学問が病跡学なのですが、その生き方の中でどうしてその作品が永遠の輝きを持つようになったかという事を、精神医学的な視点を含めて研究するのは結構面白いなと思って始めました。私自身、最初から音楽活動はやっていて、精神科の診療もしていましたので、2つの接点になる学問なのですね、病跡学というのは。それで年に一本くらい論文を書くようになりました。それをまとめたのが、この本ともう1つ以前に出版した本(『危機的状況における大音楽家』大学教育出版 2002)です。

一瞬の感動が永遠に感じられる瞬間を追求したい

マーラーは超越性、永遠性を体験させてくれる音楽家

では、一番好きな音楽家は誰ですか。

演奏するのと聴くのとでは全く違いますね。聴くのであればモーツァルトですが、演奏するとき一番得意としているのはマーラーでしょうね。タイトルではないですが、マーラーの曲の演奏においては超越性、永遠性を演奏者全員で一番共有しやすく、マーラーはそれらを体験させてくれる作曲家ですね。その価値はかけがえがない。仮にいくら曲が長くて、演奏者がたくさん必要で、それまでの過程が大変であっても、それに見合う以上のものをマーラーは与えてくれます。

医学と音楽を絶対に両立する

先生はどのような学生時代を過ごされたのですか。

最初から本当は音楽の方向に行きたかったのですが、私の家は父も祖父も開業医をしていて、高校3年のとき相談しましたらすべての人に反対されてしまいました。でも医学部へ行った後、自分の生き方がおかしいような感じがしてきて、結局好きな音楽をまっすぐしようと決心しました。芸大時代はまだ試行錯誤で、何を自分がしているのかと探している時代でしたけれど、芸大に期待した程の魅力が十分にあったとは言え、途中から両方しようということに変わってきました。三重大学にきてからは、三重大学管弦楽団に入って、学生指揮を担当していたので、それを将来の活動に生かしたいとも思いました。将来は医学と音楽を絶対に両立するんだという事を学生時代から考えていましたね。

音楽に関しては、若い時からモーツァルトを聴くのが好きでした。ただ、若い時は今のように多様に聴くわけじゃなくて、たとえば、シューマンであった

大谷正人 先生  
教育学部 特別支援教育 教授

『音楽における永遠をめざして : 音楽のパトグラフィー 2』

〈大学教育出版 2013.3〉  
[所在] 図・開架・図書  
[請求記号] 762/O84/2

前作『危機的状況における大音楽家』から10年の年月を経て刊行。



タイトルにもありますが「音楽」は「永遠」なんでしょうか。

音楽はその曲自体が名曲だと楽譜として永遠に残る曲はいっぱいありますけれど、楽譜と音楽とは別です。音楽は一瞬に生まれて、一瞬に消えていくものなのです。その一瞬の感動が永遠に残るといふ事はありえて、永遠に続くような感動を創り続けたいというのが、指揮者としての原点なのです。人間は必ず死にますが、逆に言うとう人間は必ず死ぬからこそ、生きた瞬間が永遠になりうる。もし人間の寿命が無限であれば、永遠というのはあり得ないと思うのです。この本にもマーラーの八番に関する論文が載っていますが、かつてマーラーの交響曲第八番を演奏した時、演奏時間は80分その時の演奏者は500人弱でした。たった80分のためだけに、それだけの人数とすごいお金と時間を費やしました。でもその瞬間が演奏者にとって聴衆にとって永遠に感じられる瞬間であれば、何ももったいないはないのです。そういう体験を追求したいというのが、原点でもあります。

学生時代に生きていくうえで土台作りをしてほしい

三重大学へメッセージをお願いします

学生時代というのは、自分の将来のためになる活動、学問にしても、芸術にしても、違う世界でもそうだけれど、自分が生きていくうえで、礎を一番作りやすい時期ですよ。ですから、そういった勉強とかクラブ活動とか、いろんなものを通じて、将来本当にいきいきと生きていけるような土台を、ぜひ学生の時に見つけて、それを学生時代が終わってから発展させていただけると、その人の人生は豊かになると思います。そういった事を一番に希望したいですね。

【大谷正人先生プロフィール】

三重県立伊勢高等学校卒業後、慶應義塾大学医学部へ入学するが音楽家をめざし中退。東京芸術大学音楽学部楽理科を卒業後、三重大学医学部を卒業。三重大学医学部附属病院精神神経科へ入局。Max Planck精神医学研究所(ドイツ)への留学経験を経た後、三重大学教育学部助教授、後に教授となり現在に至る。現在、教育学部で授業を担当するとともに、医学部附属病院や他の病院で精神疾患の診療に携わる傍ら三重大学医学部卒業と同時に仲間と創設した「伊勢管弦楽団(アマチュア・オーケストラ)」の常任指揮者兼音楽監督を長年務める。

ここから広げよう!!各学部の先生からの オススメ本 READING LIST

共通教育 太城康良先生  
養老孟司 著 『死の壁』  
新潮社  
[所在] 図・開架・図書  
[請求記号] 114.2/Y 84  
誰もが必ず通る道でありながら目をそむけてしまう死の問題について、安楽死、脳死からなぜ人を殺してはいけないか、なぜ戒名か、戦争、死体の人権についてなど様々なテーマを平易な言葉で論じている。著者の専門は解剖学であるが歴史、文学、社会学などの幅広い分野の視点を交えた著者の考え方を参考に、自分の死生観を問いつつ契機として、理系文系を問わず本書を推薦する。

生物資源学部 高松進先生  
細矢剛、出川洋介、勝本謙 著 『カビ図鑑：野外で探す微生物の不思議』  
全国農村教育協会  
[所在] 図・開架・図書  
[請求記号] 474.7/H 95  
汚くて怖いというイメージがある「カビ」っていったいどんな生物なのだろうか。同じ菌類であるキノコの本はたくさん出ているが、カビを紹介した本はこれまでなかった。本書は数多くの写真によってカビの美しく楽しいミクロな世界をわかりやすく紹介している。これまでカビには無関心だった君もこの本を読むことによってカビの不思議な世界にどっぷりはまること請け合いです。

工学部 伊藤敬人先生  
井本稔 著 『ナイロンの発見』  
東京化学同人  
[所在] 図・開架・図書  
[請求記号] 579.3/I 48  
私たちの身の回りには高分子化合物の一つ「ナイロン」がどの様に発見されたのかを、井本稔先生が発見者カラーズになりきり、どの様に考え、苦悩して発見に至ったのか、また「ナイロン発見者」として名声を得てからの研究者としての更なる苦悩の心境が日記風に書かれた本である。新しい材料を見出す苦悩が書かれており将来研究開発を目指す理系学生諸君に一度は読んでほしい一冊である。

医学部 中野正孝先生  
西内啓 著 『統計学が最強の学問である』  
ダイヤモンド社  
[所在] 図・開架・図書  
[請求記号] 350.1/N 86  
統計学が得意という人はそう多くはないだろう。統計学の有用性を知ってもらうために、医療系だけでなく、他の分野の学生にも読んでもらいたい本の1つである。統計学の未履修者には少し難しいところもあるかもしれないが、将来を担う学生諸君が「統計リテラシー」を身につけるきっかけとしてもらい、決して拝金主義や実利主義に陥ることなく、社会に貢献していただくことを期待したい。

教育学部 牧原義一先生  
リチャード・P.ファインマン 著 大貫昌子 訳 『ご冗談でしょう、ファインマンさん』  
ノーベル賞物理学者の自伝  
岩波書店  
[所在] 図・開架・図書  
[請求記号] 289.3/F 23/1-2  
科学の理論を理解することは難しいかもしれないが、著名な科学者の生立ちやエピソードを知ることが楽しい。本書は、個性的なノーベル賞物理学者ファインマン教授の自伝である。金庫破りの方法や、バーでの喧嘩と翌日の講義の話など、その体験談は映画を見るように躍動的でおもしろい。この本から、「物事の本質を見極める」というファインマンの新鮮で真摯な姿勢が伝わってくる。

人文学部 田中亜紀子先生  
ハリエット・アン・ジェイコブズ 著 ・堀越ゆき 訳 『ある奴隷少女に起こった出来事』  
大和書房  
[所在] 図・開架・図書  
[請求記号] 289.3/J 12  
本書は奴隷少女が、様々な苦勞を経て自由を手に入れるまでの記録である。雇い主から性的な欲望の対象となった少女が自らを守るために選んだ方法は衝撃的なものであり、また、その人生は奇蹟的なものではあった。それでもなお、この少女が読み書きの能力を有していたおかげで、私たちは150年前に実在したある少女の決めてあきらめなかった人生や奴隷制度の問題を知ることができる。